

## まえがき

徳島大学総合科学部人間社会学科・社会学研究室  
助教授 榎田美雄 (kashida.yoshio@nifty.ne.jp)

### 1

平成 15 年度の榎田ゼミ（4 年次生 4 名、3 年次生 2 名＝但し、吉野秀紀君は前期のみの単位履修だったので執筆はせず、製本・印刷作業にのみ加わった＝、大学院人間自然環境研究科人間環境専攻 1 名）では、エスノメソドロジーおよび家族社会学をテーマとした研究活動をおこなった。4 年生が多かったため、後期は研究発表を中心としてゼミ運営をおこなった。この点 3 年生の田中君には自習部分の多いきつい演習となったかも知れない。徳島大学社会学研究室では、学生に調査をすることを強く勧めている。今年の榎田ゼミでは、それに加えてさらに、自らの行っている研究が、本当に社会学的なものであるか否かをチェックしながら研究を進めることを要求した。心理学的説明ですませることが可能に見える事実（たとえば、山尾論文におけるパラサイト・シングルの増加等々）にも、その「心理」を支える社会的相互作用があるという議論が可能ははずだ。このことにまで調査と考察がたどり着くよう議論をすることを要求した。多くのゼミメンバーはこの期待に堪えてねばり強く考え論じてくれた、と編者は思う。執筆諸氏の努力に感謝する。

慣例に従い、扱ったテキストを列挙しておこう。教科書と副読本は以下の通りである。

- 1) 教科書として、西阪仰 2001 『心と行為』岩波書店、西阪仰 2003 「参加の構造とモノの対象的性格」 in 『研究所年報』3 3 号:191-201。マイケル・リンチ 1997 = 2000 「コンテクストのなかの沈黙」 in 『文化と社会』第 2 号:6-36、串田秀也 2002 「統語的単位の開放性と参与の組織化(1) - 引き取りのシークエンスの環境 - 」 in 『大阪教育大学紀要 第 部門』50(2):37-46、D.Maynard2003 『Bad News ,Good News』。
- 2) 副読本として、山崎敬一・西阪仰編 1997 『語る身体・見る身体』ハーベスト社、好井・山田・西阪編 1999 『会話分析への招待』世界思想社、上野直樹 『仕事の中的学習 - 状況論的アプローチ - 』東京大学出版会、ジーン・レイブ&エティエンヌ・ウェンガー 『状況に埋め込まれた学習』産業図書、石川准・倉本智明編 『障害学の主張』明石書店、および、サーサスほか 1989 『日常性の解剖学 - 知と会話 - 』マルジュ社。

本ゼミ論集は、そのタイトルを『社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 - 』とした。社会学であることを強く志向した今年のゼミ方針に合わせての命名である。なお、掲載順に関しては、提出された原稿を内容にしたがって編成し、冒頭の師橋論文から読んでいくとエスノメソドロジーの基礎知識も得られるよう配慮した（論文 6 篇はすべて単著）。

### 2

今年のゼミ生も、榎田の誘導にしたがって全員が調査（ビデオ分析、参与観察、長時間インタビュー）の成果を提出した。分量の多少はあるがどれも力作でありかつ前例の少ないものであると自負している。各方面で活用して頂きたい。

以下全作品について、簡単に編者としてのコメントを付し、読書案内としたい。

- (1) 師橋論文（「結婚式の着付けにおけるエスノメソドロジー - 控室空間の社会的達成 - 」）について。

タイトルから結婚式の研究と思われた方には申し訳ないが、これは「結婚式」の研究ではない。むしろ、サブタイトルに“控室空間の社会的達成”とあるように、「メイクアップ」という「制度的場面」の相互行為分析である。エスノメソドロジーは「時間・歴史」的要素を無視しているとしばしばいわれるが、ここでは、結婚式当日のメイクアップ場面のなかで先行する打ち合わせ場面が参照されている。すなわち、そこで作成されたメモが今すべきこととの関係でハイライトされており、このような形で「過去」や「歴史」や「記憶」が有意味化されている（レリバントなものになる）ということがよく分かる相互行為分析になっている。主役であるはずの「花嫁」が「専門家・素人」関係では、「素人」として「技術者」に譲っているようすなども興味深い。

- (2) 西下論文（「ダンス教室のインストラクション場面における相互行為分析」）について。

「教育・指導」は、場面的達成である。西下が主張していることをつづめていうと、こうなる。しかし、西下はただ単にそうしているわけではない。「身体」をもちいた「教

育・指導」場面で高速に取り交わされているコミュニケーションを詳細に分析しながら彼女は、教師と生徒間だけでなく、生徒と生徒間でもごく当たり前に「教育・指導」活動がなされていること、「教育・指導」の場面的達成にあたっては、身体動作の一部に対するハイライトがとても有効に活用されていること、時間の長短にしたがって3～4段階にわかれた「教育・指導」実践が存在し、それぞれ違った編成のされ方がされているようにみえること、などを指摘する。単に、「生徒-生徒」間にも「先生-生徒」間関係同様の「指導・教育」場面が成り立つ、とする単純な議論には収まらない、構造的で領域開拓的な研究がなされているといえよう。叙述が、いささか平板で盛り上がり欠ける恨みはあるが、ねらいは明確であり、今後この領域の基本的研究として参照され続けていくだけの価値があるといえよう。

(3) 西崎論文(「身体障害者施設における相互行為分析」)について。

リハビリ場面がどのように生活の場であるのか?、これが西崎の問題意識であった。結果的には、同時に複数の課題が達成されていること、かならずしも場面内の振る舞いが「治療」に志向しているとは限らないこと、この2点しか、この当初の問題意識に答えるものとしては得られなかった。この2点だけでは、「生活」であることの指摘として十分とは読者には思われまいだろう。私もそう思う。しかし、彼女の誠実な探究の結果得られた副次的な知見は、その不十分さを割り引いても十分に価値あるものであると榎田には思われた。すなわち、「結果の先取りの発話」がなされていることの例証など、障害者施設内でも、コミュニケーションが十分に複雑かつ精妙であることの例示には成功している、と榎田には思えたのである。この「先取り」さ加減は、今後続けて探究するにたるものであるといえよう。さらに、今回の論文には明確に書かれていないが、施設内で相手を「待つ」「待たせる」ということが、ほんとうに頻りに日常的に行われていることにも彼女は注目し、それなりに記述してくれている。このことも、今後の研究テーマであろう。

(4) 山尾論文(「語りによる20代未婚女子の幸福の物語-同居という生き方が選択されたわけ-」)について。

多面的に読める論文である。物語研究としても、パラサイト・シングル論としても、準拠集団論としても読めるだろう。ただし、本人自身が20代女性ということもあり、「未婚女性の親元同居という生き方」には、それなりの合理性も社会的根拠もあるのだ、というメッセージ主張が、むしろ全体の基調トーンとなっている。この「思い」をどれほど社会的に主張し得ているか、がこの論文の評価の枠となるべだと思う。そして、身びいきかもしれないが、編者の目からみれば、それなりに目配りが効いており、注目すべき論点の呈示には成功した問題提起論文としては成功したものになっているように思われる。こういう「執筆意欲」のはっきりした論文は、記述内容の精密な論文同様に高く評価されても良いのではないだろうか。

(5) 田中論文(「不安や心配のコントロール-乳がん患者のインタビューから-」)および木野論文(「地域住民参加型の新しい子育て組織の研究-ファミリー・サポート・センターで何がおきているか-」)について

紙面がつきてきたので、上記2作品については、まとめて論評しておこう。どちらもインタビューおよび参与観察に基づいた研究である。田中論文も木野論文も、インタビューをさせて頂いた相手の方が、とても有能で、我々が聞きたいことを話して下さっている。もちろん、有能なインタビューイヤーを見つけることは、調査者の最初の最重要の仕事だが、そのインタビューイヤーの有能さを超えた分析のキレを示すこともまた調査者の能力でなければいけないだろう。そういう意味では、どちらも課題の残った作品であろう。

なお、論文作成に用いたデータ(ビデオテープや音声テープ)については、基本的に榎田研究室に保管されている。データのうち貴重なもの(たとえば、木野のインタビューデータ等)は、匿名化措置をしたうえで、機会をみてCD-ROM化(あるいはホームページ掲載)を試みる予定である。研究者の2次利用についても検討しているので、関心のある向きは問い合わせを欲しい[榎田の上記e-mailアドレスへどうぞ]。

=謝辞=

今年もまた多くのかたの助力をえて研究を進めることができた。とりわけ、国際保健医療大学の阿部智恵子氏、国際基督教大学の岡田光弘氏、および工学院大学の藤守義光氏には、ご来徳の機会ごとにゼミでの長時間討論に参加してもらい、たくさんの助言を賜った。ここに記して感謝する。